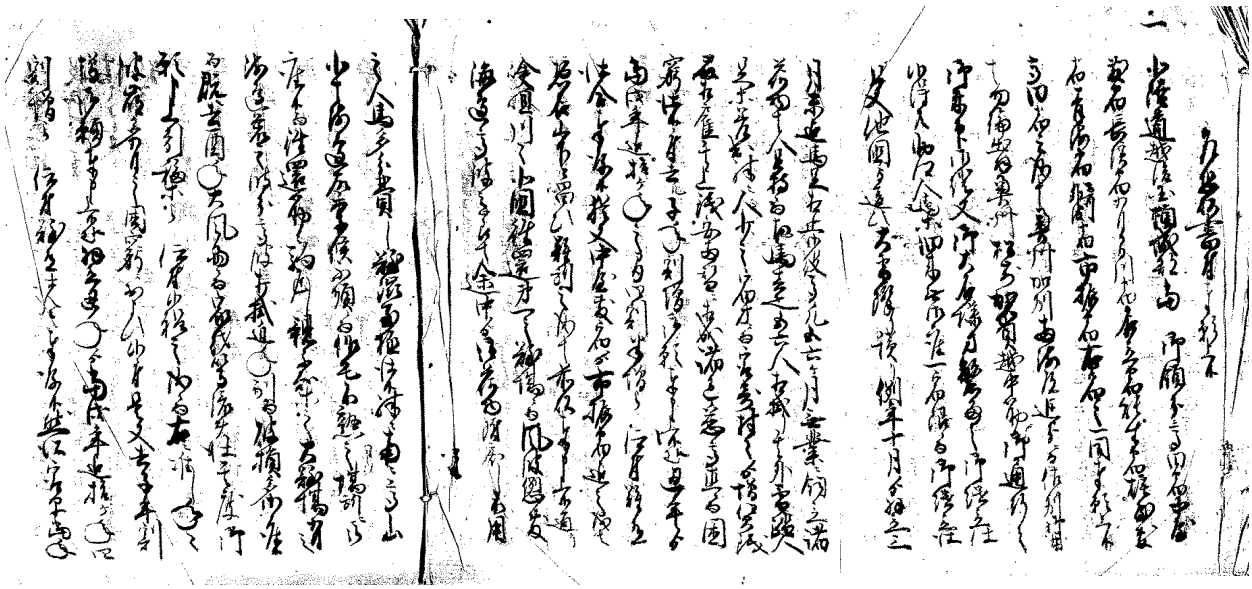
# 橋本家文書目録解題

名立には古くから宿駅が置かれた。近世においては名立大町村と名立小泊村とが相宿であった。しかし、宝暦元年（1751）の地震によって名立小泊村が宿役を果たすことができなくなり、名立大町村がその責務を一手に担ってきた。そのため、同村の惣代であった橋本家には交通関係の史料が多い。宿割、継送り、宿泊中の病人・死亡者の扱いなど宿場の機能に関するものが目立ち、寛政元年(1789)の私領・幕府領巡見使に関するものも多数ある。また、天保９年(1838)の「宿場賃銭割増一件諸願書留」（「乍恐以書付奉願上候」99-58-1)およびそれに付随する絵図もある。

名立大町村は名立川の河口にあり日本海に接しているため、橋や民家囲石の普請、海難事故に関する史料もある。



「乍恐以書付奉願上候」御役所　←　10ヶ宿惣代有間川宿問屋友右衛門
（天保９年９月）宿場賃銭割増に関する願書